

土壌流出防止対策事業について

1 事業の背景

丹沢の奥山地域においては、ニホンジカの影響による林床植生の衰退を原因とする土壌流出が進行しており、ブナ林に依存する希少野生動植物の生息環境も急速に悪化をしている。

特に、平成16年度から2年間にわたって行なわれた丹沢大山総合調査の中で、丹沢大山国定公園の特別保護地域である清川村堂平のブナ林内では、前述の理由により自然林内の土壌浸食が深刻化していることが判明した。



土壌浸食の状況



土壌浸食の状況

2 平成18年度までの取り組み

神奈川県ではこれらの土壌浸食対策に緊急的に取り組むために、平成17、18年度丹沢大山総合調査団との連携による「丹沢大山保全再生対策委員会」を設置し、総合的な対策の検討と試験施工を実施し、林内傾斜地の表面土壌浸食に緊急に対応する手法の改良・開発を行なった。

この結果、施工性が良く急斜面に対応した植生保護柵や、落枝落葉を捕捉し浸食軽減効果のあるネット工、木製筋工等の様々な新工法が開発され、それらの効果が確認された。



急斜面用植生保護柵の施工状況



木製筋工(竹繊維ネット)の施工状況



リター捕捉ロール工の施工状況



リター捕捉ネット工の施工状況



金網筋工の施工状況及び効果



ネット被覆工の施工状況

3 平成19年度以降の取り組み

平成17、18年度の試験施工での成果を踏まえて、丹沢大山国定公園の特別保護地域及び特別地域内における林床植生の衰退を原因とする土壌流出が進行している地域において、急斜面用植生保護柵、ネット工等の様々な新工法の組み合わせによる「土壌流出防止対策事業」を面的に展開し、「丹沢大山植生回復対策事業」や「自然再生事業」等との一体的な実施によって、ブナ林の保全・再生を図る



4 平成19年度事業計画

1) 土壌流出防止対策工事

東丹沢の堂平周辺及び天王寺尾根の林床植生衰退及び土壌流出が進行している地域において、急斜面用植生保護柵、ネット工等を面的に組み合わせた土壌流出防止対策を行ない、土壌流出の防止と林床植生の回復を図る。

2) 航空測量等業務委託

土壌流出防止対策をはじめとする、森林の保全・再生施策を展開するための基礎情報となる高精度な地形データを取得するため、広域的なデジタル航空写真撮影、航空レーザー計測ならびに地形図等の作成や地形解析等を行なうとともに、土壌流出防止対策の施工に必要な現地測量調査を行なう。



2007年のブナハバチ大発生について

自然環境保全センターでは丹沢ブナ林等の衰退原因解明調査の一環としてブナハバチ調査を実施している。

今年はブナハバチ大発生の年であり、6月下旬にはブナハバチ幼虫により食害を受けたブナが丹沢山地の広い範囲で発生した。その被害状況を把握するため、丹沢山や檜洞丸の山頂周辺で被害調査を進めている。

1 ブナ被害調査結果の概要

- 調査期間 2007年6月～10月（今後の予定を含む）
 - 調査対象 檜洞丸261本、丹沢山279本
 - 調査方法 登山コース沿いのまとまりのあるブナを対象に、任意地点において、単木ごとに樹冠全体を観察し、目視で食害率を判定。
 - 調査結果 ブナの成長等の影響が大きいと考えられる「大害」以上の食害を受けた樹木
 - 檜洞丸：82%（激害：72%、大害：10%）
 - 丹沢山：47%（激害：19%、大害：28%）
- ＜食害率は次の4段階に評価＞
- 激害：食害率90%以上 大害：食害率50～90%
 - 中害：食害率25～50% 微害：食害率25%以下

2 今後の対応

今年は1997、1998年以来、ほぼ10年ぶりの大発生となった。大発生のメカニズムはよくわかっていないが、現状としてブナは甚大な被害を受けている。

今後とも調査を継続しながらブナハバチの生態や防除方法の調査研究を進め、誘引トラップによる成虫の捕獲、粘着トラップによる幼虫の捕獲などにより他の生物への負荷を最小限に抑えつつブナハバチ密度を下げる効果的な方法を検討していく。



写真-1 ブナハバチによる激害型被害の状況



写真-2 ブナの葉すべて食害
(枯れたようにみえる)



写真-3 ブナハバチ成虫



写真-4 ブナハバチ幼虫の摂食状況



写真-5 誘引トラップ設置状況

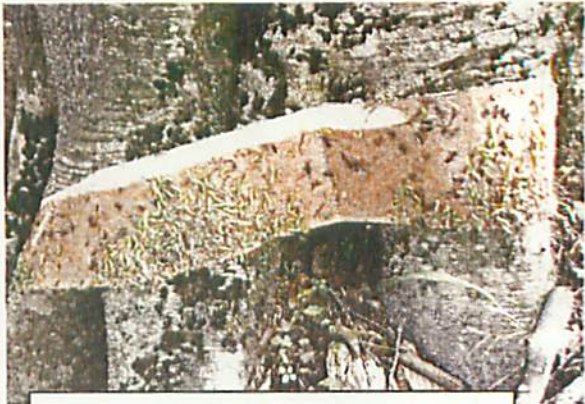


写真-6 粘着トラップ設置状況